



NEW GENERATION CLIMBERS

#006

原田 海

KAI HARADA

森山憲一＝文・写真

「勝負は意識しません。ただ強くなりたい」



PERSONAL DATA

出身地 大阪府岸和田市
生年月日 1999年3月10日
クライミング歴 8年

主な戦績

2017年 ワールドカップ重慶大会5位
2016年 アジアユース選手権ボルダリング1位
2016年 全日本ユース選手権ボルダリング1位

最高グレード

ボルダリング四段+、リード5.13d

ホームジム

フィッシュアンドバード二子玉川店
<http://fish-bird.co.jp>

茶

髪にクリッとした大きな目。身長168cmできゃしゃな体つき。スポーツマンというよりはジャニーズ系のイメージだ。ところが、まだ少年の面持ちを残したこの18歳が、ボルダリング・ワールドカップで5位に入った強者なのだという。

同じ18歳で、やはりワールドカップで大活躍している榎崎明智さん（本連載、昨年の第2回で登場）が、「同世代のライバル」と話すのが、この原田海さんである。ワールドカップの表彰台こそ榎崎さんに先を越されたが、決勝に残ったのは原田さんが先。まさに格好のライバルとして、今年、世界を舞台にブレイクを果たした。

しかし、本人を前にしていると、この人が世界5位に入った強力クライマーとは思えない。もともとおとなしい性格なのか、取材慣れしていなくて緊張しているからなのか、はにかんだような表情で、質問にひとつひとつ

いねいに答えてくれる。どちらかというところ控えめで真面目な印象。早生まれのため、この春から大学生となっているが、まだ高校生のような雰囲気すら残している。

現在は横浜の大学近くに住んでいるが、出身は大阪。クライミングを始めたのは小学校5年生のときで、大阪の実家近くのクライミングジムにたまたま行ってみたところ、すぐに気に入って、「初日から一日中ジムにいました」。

それが8年ほど前のことなので、クライミング歴はすでに長いのだが、コンペ（競技会）に初めて出場したのは3年前。それまでは、コンペの存在すら知らなかったという。

「行きつけのジムで登っているだけで、クライミングが競技として行なわれていることとか、有名なクライマーの存在とか、外の世界のことをまったく知らなかったんです」

その一方で、岩場には通っていた。



左上) 目力が強く、写真映える顔立ち。「イケメンですね」というと、照れくさそうに笑った。 右上) 取材時の使用シューズはマッドロック・シャーク。完璧にしくりくるシューズにまだ巡り会っておらず、いろいろ試し中だという。 左下) 壁のなかで大きく見えるのは、うまいクライマーの特徴。 右下) 4月にオープンしたばかりのフィッシュアンドバード二子玉川店が新しいホームジム

ジムで知り合った人に連れられて、岐阜や三重の岩場によく出かけた。中学生のころに、三重にある宮川ボルダアの難課題「コルベット」(四段+)を登っていたというのだから、早熟な才能がうかがえる。

初めて出場したコンペは、高校1年ときのジュニアオリンピック。これはリード競技だったが、原田さんはそれまでボルダリングしかやったことがなく、ロープを結んで登るのは、このときがほとんど初体験。2、3回練習をただけのぶっつけ本番で、それでも5位に入賞している。「ボルダア能力だけでなんとか押し切れました」と笑うが、それも才能なくしてできることではないだろう。

アットホームなジムで、ただクライミングを楽しんでいただけの少年が、高校生になって初めて外の世界を知る。しかしそこで「井の中の蛙大海を知らず」とはならず、逆に、「外界は井の

中にいた原田 海を知らなかった」という結果に。他人と自分を比較することも競い合うこともなく、純粹培養のように腕を磨いていた原田さんは、いつの間にか、クライミング界が驚く実力を身につけていたらしい。

近ごろ競技で活躍している若手クライマーの多くは、小学生や中学生時代からコンペに出場して経験を積んでいる。一方で、岩場の経験を持つ人は多くない。ことごとく逆を行ってきた原田さんの育ちは、そのなかではかなり異色といえるだろう。

初めてのコンペ出場からわずか3年、今年4月に中国・重慶で行なわれたワールドカップで、原田さんは初めて決勝に残り、5位入賞を果たす。勢いに乗って、5月の東京・八王子大会に臨むが、当日のアップ中に足を捻挫して無念の欠場。「まだ万全ではないです」と言いつつ、1カ月後から復帰し、ワールドカップにも出場を続けている。

「いまはコンペでいい成績を残すことが最大の目標です。きっかけは、2年前のアジアユース選手権。ここで2位に入ったことで、気持ちが競技に向きました。オリンピックもかなり意識しています」

クライマーとしては、目立つ特徴がないかわりに、苦手なことも少ないオールラウンダータイプだと自己を分析。ボルダリング、リード、スピード3種目の合計で争われるオリンピックには向いているといえるだろう。しかも競技に本格的に取り組んでまだ3年弱。東京オリンピックまでに、爆発的な成長を見せる可能性もある。

「他人や成績を意識しすぎるとよくないということもわかってきたので、周囲はあまり気にせず、マイペースでやっていきたいです。ただ、メイチ(楢崎明智)はやっぱりライバルなんです……いつかは絶対超えてやろうと思っています」